

薬学実務実習生の高齢者イメージに関する研究

○川出 義浩^{1,2}, 山本 美由紀³, 江崎 哲夫², 坂下 真大¹, 岩尾 岳洋¹, 赤津 裕康⁴, 早野 順一郎⁴, 鈴木 匡¹, 木村 和哲^{1,2,4} (1名市大院薬, 2名市大病院薬, 3名市大看護, 4名市大院医)

【目的】名古屋市立大学は平成 25 年度より超高齢化社会に対応できる医療人材育成事業として「地域と育む未来医療人『なごやかモデル』」を進めてきた。当大学薬学部では大学病院での薬学実務実習生を対象に、地域包括ケアシステム体験実習（以下、体験実習）を企画した。これまで薬学生の高齢者イメージに関する報告はないため、高齢者医療教育のための基礎データとして、体験実習の前後で実習生の高齢者に対するイメージが改善するか否かを検討した。

【方法】体験実習は 1 日 1 回とし、午前が高齢者サロン、午後に介護施設（通所介護または小規模多機能型）にて実施した。平成 27 年 9～10 月に体験実習を行った 10 名を対象に、記名式自記式質問紙調査を体験実習前と直後、実務実習終了時（平成 27 年 11 月中旬）の 3 回行った。高齢者イメージ測定には、Semantic Differential (SD) 法を用い、50 項目の形容詞対を否定的な極から肯定的な極へ順に 1 点～5 点に配置、3 点を中立点とし評価した。

【結果】回答を得た 10 名の内訳は男性 6 名、女性 4 名で平均年齢 24.0 ± 1.6 歳であった。形容詞対 50 項目の平均値 ± SD は、体験実習前 3.01 ± 0.51 点、直後 3.61 ± 0.51 点、実務実習終了時 3.30 ± 0.38 点であった。体験実習前と直後、直後と実務実習終了時、体験実習前と実務実習終了時のいずれの比較においても有意な差が認められた ($p < 0.001$)。体験実習前と実務実習終了時の比較では形容詞対「遅い-速い」、「反発-同調」の 2 項目のみ有意な差が認められた ($p < 0.01$)。

【考察】体験実習後、実習生の高齢者イメージは肯定的に改善した。高齢者に対してより元気で、話ができるイメージが増加した。しかし、時間が経過すると効果が減弱することから、継続的な実習が必要と考えられた。